慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヒュームにおける「哲学的関係」と「自然的関係」の区別 : プロセス解釈再考
Sub Title	Hume's distinction between natural and philosophical relation : the procedural interpretation revisited
Author	高萩, 智也(Takahagi, Tomoya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2023
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.151 (2023. 3) ,p.107- 136
JaLC DOI	
Abstract	This paper aims to clarify the distinction between "natural" and "philosophical" relation on Hume's Treatise. Although there is scant textual evidence on this distinction, commentators have wrestled with this problem for more than half a century since the distinction is of great importance in making sense of Hume's two definitions of cause. Recently, Helen Beebee has offered a procedural interpretation, according to which, the distinction lies in the difference between processes we use in recognizing relation. Although this procedural interpretation seems promising, it has something that needs clarification. Indeed, Peter Millican criticizes this interpretation. If this is understood in a particular way, it could be the case that we cannot advocate this procedural interpretation. What makes matters worse, Millican argues that there is no substantial distinction between natural and philosophical relation. Thus, in this paper, I mainly wrestle with two issues concerning Beebee's interpretation. Firstly, I articulate her procedural interpretation, eliminating the ambiguity inherent in the word "process." Secondly, against Millican, I argue that the distinction between natural and philosophical is indeed a substantial distinction, playing a pivotal role in Hume's science of man.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000151-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒュームにおける「哲学的関係」と「自然的関係」の区別

プロセス解釈再考

高　萩　智　也*

Hume's Distinction between Natural and Philosophical Relation The Procedural Interpretation Revisited

Tomoya Takahagi

This paper aims to clarify the distinction between "natural" and "philosophical" relation on Hume's *Treatise*. Although there is scant textual evidence on this distinction, commentators have wrestled with this problem for more than half a century since the distinction is of great importance in making sense of Hume's two definitions of cause. Recently, Helen Beebee has offered a *procedural interpretation*, according to which, the distinction lies in the difference between processes we use in recognizing relation.

Although this procedural interpretation seems promising, it has something that needs clarification. Indeed, Peter Millican criticizes this interpretation. If this is understood in a particular way, it could be the case that we cannot advocate this procedural interpretation. What makes matters worse, Millican argues that there is no substantial distinction between natural and philosophical relation.

Thus, in this paper, I mainly wrestle with two issues concerning Beebee's interpretation. Firstly, I articulate her procedural interpretation, eliminating the ambiguity inherent in the word "process." Secondly, against Millican, I argue that the distinction between natural and philosophical is indeed a substantial distinction, playing a pivotal role in Hume's *science of man*.

* 慶應義塾大学哲学・倫理学専攻 後期博士課程 2 年

はじめに

これまで多くの哲学者たちが「関係（relation）」の本性やその認識方法をめぐって議論してきた．デイヴィッド・ヒューム（David Hume 1711–1776）もその一人である．しかしヒュームの「関係」概念は多分に解釈の余地があり，実際これまでにさまざまな解釈上の問題が論じられてきた[1]．その問題のうちに，「自然的関係」と「哲学的関係」の区別をめぐるものがある．これは『人間本性論』第一巻でヒューム自身によって導入された区別であり，とりわけ彼の因果論と深く関わる．これを理由にして，この区別基準を明確にするテキスト的証拠は少ないにもかかわらず，これまで多くの論者たちがそれについてさまざまな解釈を提示してきた．

伝統的な解釈によれば，区別基準となるのは関係項の存在論的身分の違いである．関係項が観念（心的対象）であるときには自然的関係であり，それが実在の対象であるときには哲学的関係というわけだ．また近年ビービーが提示したプロセス解釈によれば，区別基準となるのは判断プロセス，つまり関係の認識プロセスの違いである．この解釈には一定の説得力があるように思われるが，この解釈自体が曖昧な主張を含むうえに，その曖昧さが特定の仕方で解釈されると致命的な欠点が見出される．実際この理由からミリカンはプロセス解釈に難色を示している．さらにミリカンは，既存の解釈を一蹴する批判を提示し，新しい解釈を提示した．彼によれば自然的関係と哲学的関係の区別は，既存の解釈で主張されているような哲学的に実質のあるものではない．この区別の導入は，ヒュームが読者に対して「関係」という言葉の意味が二通りあると示したうえで，自らは「哲学的関係」の意味でその言葉を用いるという宣言にすぎないというのだ．

こうした論争があるなかで本論文は，ビービーのプロセス解釈を擁護し，それをより充実したものにすることを目指す．つまり本論文が行うべき主なことは①プロセス解釈の主張内容を明確にし，②それがミリカンの

プロセス解釈のみに対する批判と，プロセス解釈を含む既存の解釈全般に対する批判に耐えうることを示す，という二つである．これを通して最終的には，自然的関係と哲学的関係が次のように特徴づけられ，区別されると主張する．すなわち，任意の個別の関係 *r* に関して，関係 R の観念を適用して認識している場合それは哲学的関係であり，関係 R の観念を適用せず（あるいはそもそも R を持たず）に認識している場合には自然的関係である，と．このように洗練されたプロセス解釈は，関係を認識するプロセスが二つ存在することがヒュームの人間学にとって重要な役割を果たしている，ということを明らかにする．

本論に先立って本論文の構成を述べておく．第一節では，自然的関係と哲学的関係の区別に関するヒューム自身の議論を概観する．この整理の過程で，伝統的解釈が退けられる．第二節ではまず，前節の整理を受けて，ビービーのプロセス解釈が有望であると思われることを示す．その後で，しかしビービーの主張自体に曖昧性があり，解釈の余地が残ることを明らかにする．そこで本節でその曖昧性を除去する．最後に第三節で，プロセス解釈を曖昧性とは別の観点から否定するデフレ解釈を検討し，プロセス解釈が妥当であることを示す．その後で，プロセス解釈の主張する自然的関係と哲学的関係の区別基準が，ヒュームの人間学において重要な働きを担っていることを確認する．

1.　自然的関係と哲学的関係の区別と，その古典的解釈

1.1　自然的関係と哲学的関係

ヒュームは『人間本性論』第一巻第一部，すなわち，自身の哲学探究に用いる諸概念を導入し説明する箇所で，「関係（relation）」について次のように述べている．

「関係」という言葉はふつう，互いにとても異なった二つの意味で用

> いられる．ひとつには，それによって想像力のうちで二つの観念が結ばれて，既に説明した仕方で，一方が他方を自然と導き入れるところの性質を意味するのに使われる．もうひとつには，想像力における二つの観念の結合が恣意的な場合であっても，それらを比較することが適切であると考えるところの特定の状況を意味するのに使われる．（T 1.1.5.1）

ヒュームによれば，私たちの心には「観念連合（association of ideas）」といって，特定の観念どうしを頭の中で結びつけ，一方のこと考えればもう一方のことを“自然”と考えてしまう傾向性がある（cf. T 1.1.4.1）．「それによって想像力のうちで二つの観念が結ばれて，既に説明した仕方で，一方が他方を自然と導き入れるところの性質」とは，この観念連合を引き起こすような性質のことであり，彼曰く「類似」，「近接」，「原因と結果」がそれに該当する．ナポレオンをよく描いた絵画はナポレオンのことを（類似），ナイフはフォークのことを（近接），子どもは親のことを（因果）思い出させるというわけだ．だから私たちは観念連合を引き起こすようなこれらの性質で結ばれた対象のことを「関係がある」と言う．他方で，観念連合を引き起こさないような対象の間にも私たちは関係を見出すことができる．例えば私は奈良県に行ってもギリシャ共和国のことを自然と思い出すことなどないが「奈良県とギリシャとは約 9,000 km 離れている」という知識を持つ．ヒュームによれば，これも「x と y は空間的に離れている」という関係の認識である．要するに，ある観念 x と，それを考えるとつられて自然と考えてしまうような観念 y に対して「関係がある」という場合と，それを考えても自然と考えはしないような観念 z に対して「関係がある」という場合があるというわけだ．

ヒュームは，前者の意味で用いられた「関係」という言葉によって指示される関係を「自然的関係（natural relation）」（NR）そして後者のそれを

「哲学的関係（philosophical relation）」（PR）と呼んだ．その理由は先ほどの引用箇所の続きである，以下のテキストにある．

> 日常言語において私たちが「関係」という言葉を使うときは，常に前者の意味である．哲学においてだけ，何か結合する原理がなくても比較の特定の主題を意味するように［「関係」という言葉の意味を］拡張する．例えば「距離」は，哲学者によっては本当の関係（true relation）だとみなされている．なぜなら，対象を比較することによって距離の観念を獲得するからだ．しかしふつう私たちは，あたかも距離と関係とが両立しないかのように「これそれのものほど互いに距離のあるものはなく，これそれのものほど関係のないものはない」と言う[2]．（T 1.1.5.1）

ここでヒュームは，「関係」という言葉の意味が「拡張（extend）」されると述べている．だから実質的には，NR の集合は PR の集合の真部分であることがわかる．よって，あらゆる関係は① NR，② PR だが NR ではない，③ NR でも PR でもない，の三種類に分かれることになる．

ところで，NR には類似，近接，因果の三種類の関係が含まれるのであった．では PR にはいかなる種類の関係が含まれるのか．ヒュームはこれについて次のように述べている．

> 対象に比較を許し，哲学的関係の観念を生み出すような性質を全て枚挙することは終わりのない作業になると推測される．しかしもし私たちが念入りにそれらを考察すれば，難なく，それらが 7 つの一般的な項目から構成されていることを見出せる．そしてそれらがあらゆる哲学的関係の源泉だと考えられる（T 1.1.5.2）

表 1

自然的関係（NR）	哲学的関係（PR）
類似 近接 原因と結果	類似 時間と場所の関係（近接を含む） 因果関係 量と数の比 任意の性質の度合い 同一性 反対

つまりすべての PR は 7 つの基本的な PR の組み合わせから成り立っているというわけだ．その 7 つとは「類似性」,「同一性」,「時間と場所の関係」,「量と数の比」,「任意の性質の度合い」,「反対」，そして「因果関係」である（T 1.1.5.3–9; cf. T 1.3.1.1）．このことをふまえて，NR と PR に含まれる関係タイプを表にしておく（表 1）．

ここで注意されたい点がいくつかある．まず，NR のうち類似関係であるようなものの集合と，PR のうち類似関係であるようなものの集合の要素は異なるということだ．これは先に，NR は PR の真部分集合だと指摘したことからも明らかだろう．またヒューム自身も「類似性が常に観念の結合や連合を生み出すということは帰結しない」（T 1.1.4.3）と述べている．例えば私はヒトの観念と魚の観念を連合させる傾向性を持っていない．しかし私は「ヒトと魚は脊椎を持つという点で類似している」という知識を持つ．これは「ヒトと魚は類似している」という関係が，少なくとも私にとっては PR だが NR ではない関係として認識されていることを意味するだろう．

第二に,「量と数の比」や「任意の性質の度合い」といった四種類の関係は PR だけに含まれており，したがって，例えばいかなる任意の性質の度合いも NR ではあり得ない，という見解が誤りであることを理解されたい．任意の性質の度合いの関係としてヒュームは例えば色や重さをあげて

いる（cf. T 1.1.5.7）．私はハンガリーの国旗をみると常にブルガリアの国旗のことを考えてしまう（両者の国旗は使われている色が非常に似ている）．色が似ていることによって観念連合が生じるということがあるのだから，任意の性質の度合いが非常に近いような複数の対象の間には，NR として認識される関係が存在することになる．ただそれが NR のうちでは類似関係として処理されるだけである．

最後に，先の分類のうちの NR でも PR でもない関係について述べておく．ヒュームは関係の認識の根底には必ず類似性の認識があると，次のように論じる．

> これ［類似性］は，それなくしてはいかなる哲学的関係も存在し得ないような関係である．というのも，ある程度似ているものでなければ比較を受け入れないからだ．（T 1.1.5.3）

この説明によれば，どのような点でも類似性をもたないような対象の間の関係は，NR でも PR でもあり得ない．そもそも人間はそうした関係を認識できないということになるだろう[3]．

1.2　伝統的解釈

以上のようなヒューム自身の記述のみにしたがえば，「日常」と「哲学者」といった言葉遣いから，NR は一般大衆が認識する関係であるのに対して，PR は哲学者が認識する関係であるように思われる．実際伝統的には，NR と PR の区別基準はこのように認識主体の身分の違いとして理解されてきた（Bennett 1971; Penelhum 1974）．よって本論文ではこの見解を伝統的解釈と呼ぶ[4]．例えばベネットは次のように述べている．

> ヒュームは「関係」［という言葉］が二つの意味を持つと述べる．（中

> 略）哲学的関係：xRy の形態をとる任意の真な言明―例えば x は y とは似ていない―は，x と y との間の哲学的関係の成立を主張している．（中略）自然的関係：x と y の間に自然的関係があるのは，一般の人々がそれらを「関係している」とか「結合されている」と表現するときに限る．（Bennett 1971, 250–251）

ここで注目したいのは，ベネットが PR と NR の区別基準に関して，認識主体の身分の違いに加えて，関係項の身分の違いをも示唆している点である．彼は PR を「真な言明」としてファクティブなものとみなす一方，NR を「表現する」ものとしており，ファクティブとはみなしていない．言い方を変えれば，PR は客観的な対象を関係項とする実在の関係であるが，NR は心的表象（観念）を関係項とする主観的な関係づけに過ぎないというわけだ．このように考えると，もはや NR は PR の部分集合ではなく，NR と PR は互いに排他的なものとなる．なぜなら，一般的に言って，あるものが実在の対象であることと観念であることは両立しないからである．

このような示唆は，他の伝統的解釈のうちにも見出される．例えばプネルムは次のように述べている．

> ヒュームは明らかに，哲学的関係は私たち［哲学者］が語る関係であると考えている．なぜなら，特別な吟味をもとに私たちはそれらが存在することを見出すからである．他方で一般の人々は哲学的関係に気がつかないので，それに言及することができない．だから，確かにそれに注目することは奇妙（恣意的）なのだけれども，それは実際に対象のうちに存在する．哲学的関係は客観的であるけれども，私たちがそれを見出す対象はそれゆえに思考のうちでは結合されていない．なぜならほとんどの人がそれを見出さないからだ．これが理由で，哲学的関係は「自然的」ではないことになる．確かにそれは実在するけれ

ども，それに言及することは不自然なのだ．（Penelhum 1974）

プネルムはこの引用の前半部分で，NR と PR の区別基準に関して，認識主体の身分の差異という見解を提示している．そのうえで後半に入ってから，PR は「対象のうちに存在する」とか「客観的」だと述べる一方で，おそらく NR を意図してそれを「思考のうちで結合」されているものだと主張する．これはベネットと同様に，関係項の存在論的身分による区別を示唆している．

実はハウスマンが，彼らに先立って，PR と NR の区別基準は関係項の存在論的身分の違いだとはっきり論じていた．彼は次のように述べている．

> 哲学的関係，例えば類似，時間と空間における近接，そして原因と結果は，普通の対象を結合している．他方で自然的関係は，普通の対象についての私たちの思考を結合している．この二つのカテゴリーは全く異なっている．最初のものは存在論的で，二つめのものは心理学的だ．（Hausman 1967, 255）

ここでハウスマンは明らかに，PR と NR では関係項の「カテゴリー」が異なっていると主張している．

このように伝統的解釈を整理すると，彼らにとっては認識主体の差異が NR と PR の区別基準であるけれども，それはある意味で区別基準のメルクマールでしかないとも言える．実際に区別をつくっているのは，関係項の存在論的身分の差異だと言える．したがって本論文は，伝統的解釈を次のテーゼを支持する解釈として定式化する．

> テーゼ T：NR は観念を関係項とする関係であり，PR は実在の対象を関係項とする関係である．

しかしながら，このテーゼ T を受け入れることはできない．本節では最後にこのことを示して，次節のプロセス解釈への布石とする．

1.3　伝統的解釈への批判

テーゼ T を受け入れられない理由は，ヒュームにとっては NR も PR も同じく，対象を関係項とする関係だからである．つまりテーゼ T のうち「NR は観念を関係項とする関係である」という部分が否定される．例えば次の二つのテキスト箇所がそれを示している．

> この連合［観念連合］を生じさせて，精神をこの仕方で一方から他方へと運ぶところの性質は，三つある．すなわち「類似」，「時間と場所における近接」，そして「原因と結果」である．（T 1.1.4.1）

> これらの性質［NR］が観念の間に連合を生み出し，一方の観念が現れれば自然と他方を導くということは，証明する必要もないだろうと考えている．思考の行程，つまり観念が常に変化する中で，私たちの想像力が容易に，ある観念からそれに似ているものに移行すること，そしてこの性質だけでも想像力にとっては十分な絆と連合となることは明らかだ．同じく，感官はその対象が変化する際に，それらを順序に従って変化させざるを得ない，すなわち，互いに近接している通りに捉えざるを得ないので，想像力が長い習慣によって同じ思考の方法を獲得し，その対象を把握する際に空間と時間の諸部分に沿って移行せずにはいられないということもまた明らかだ．（中略）対象の間の原因と結果の関係ほど，想像力のうちに強い結合を生み出し，一方の観念をして他方の観念を思い起こさせるような関係はない．（T 1.1.4.2）

どちらにおいてもヒュームは，NR が観念連合を「生じさせる（arise）」や「生み出す（produce）」という表現を用いている．特に二つめの引用箇所後半において NR の近接関係を説明するさい，明らかに，観念連合が実在の対象の近接関係によって生み出されると主張している．つまり，確かに観念連合という原理は心的表象である観念どうしを関係づけるものであるが，NR はそれを引き起こす実在の対象の間の関係なのだ[5].

テーゼ T を受け入れられない別の理由もある．先に整理した通り，ヒュームにとって NR は PR の部分集合なのであった．他方でテーゼ T によれば，NR と PR は排他的な集合であることになる．つまり伝統的解釈の論者たちは，ヒューム自身の「拡張」というテキスト根拠を用いず，それとは相容れない別の主張を帰する．しかし，この理由を説明していない．それどころか，両者を存在論的身分の差異を理由にして排他的とみなす解釈には都合の悪いテキストが他にも存在する．例えば同じくハウスマンに対する批判の文脈でミリカンがあげるように，ヒュームは「結合であれ矛盾であれ，知覚できる関係は全て対象と印象の両方に共通でなければならない」（T 1.4.5.21）と述べているのだ（cf. Millican 2017, 8）.

以上の理由から NR と PR の区別基準は関係項の存在論的身分の差異にあるとするテーゼ T は受け入れられず，それを支持する伝統的解釈は棄却される[6].

2.　ビービーのプロセス解釈

2.1　プロセス解釈の概要

前節で明らかになった通り，伝統的解釈に反して，NR と PR はどちらも等しく実在の対象を関係項として持つ．では，これらはどのような基準で区別されるのか.

実は近年，ビービーがヒュームの因果論解釈の過程で，この区別基準に関する興味深い見解を提示した．それによれば，NR と PR の区別は「純

粋に心理学的」なものである（2011, 246）[7]．彼女自身のテキストを引用しておく．

> ある関係を「哲学的」関係と記述することは，それを「比較の主題」として考えることである．この場合，比較は特定の種類の心的活動である．またある関係を「自然的」関係と記述することは，それを全く異なった種類の心的活動として考えることである．この心的活動によって，ある観念は別の観念を自然と導き入れる．（*ibid.*）

ここで述べられている通り，ビービーによれば，NR と PR を区別する基準は「心的活動」の違いである．彼女は別の箇所で，比較とは別の「全く異なった種類の心的活動」とは「連合」だと述べている（Beebee 2011, 244）．つまり任意の関係は，「比較」と「連合」のどちらの心的活動によって認識されたかに応じて，NR であるか PR であるかが決まるというわけだ．心的活動とは要するに関係を認識する心的プロセスのことであるから，ビービーは自身の解釈を「プロセス解釈（procedural interpretation）」と呼んでいる．

ところでヒュームは，原因には NR 的な側面と PR 的な側面があるとして，それに二つの定義を与える（cf. T 1.3.14.31）．実はビービーのプロセス解釈はこの原因の二つの定義をめぐる解釈であり，NR と PR の一般的な区別基準に関する見解の提案を目的としたものではない．しかし彼女は他方で，プロセス解釈は NR と PR の一般的な区別基準であり，原因の二つの定義はその「適用」に過ぎないと主張する (Beebee 2011, 250)．そこで本論文では，プロセス解釈を NR と PR の一般的な区別基準とみなすことにする．

ビービーによれば，この解釈の主たる根拠となるのはまさにヒュームが原因の二つの定義をおこなった次の箇所である（cf. Beebee 2011, 252）．

> この関係［因果関係］に関しては二つの定義を与えることができて，それらの定義はただ同じ対象についての異なる見方を提示し，その関係を哲学的関係と自然的関係のどちらと考えさせるか，つまりは二つの観念の比較とそれらの間の連合のどちらと考えさせるか，という点でのみ異なる．（T 1.3.14.31）

確かにここでヒュームは，ある因果関係が NR であるか PR であるかは，ただ「同じ対象についての異なる見方」であり，比較とみなすか連合とみなすかという点でのみ異なる，と主張している．少なくとも認識主体や関係項の存在論的身分を区別基準とする伝統的解釈はこの「同じ対象についての異なる見方」の意味を説明できないだろう．

さらにビービーは，ヒュームが初めて NR と PR の区別に言及した先のテキストもプロセス解釈を支持するものだ，と論じる（cf. 2011, 247）．重要な箇所であるからもう一度引用しておく．

> 「関係」という言葉はふつう，互いにとても異なった二つの意味で用いられる．ひとつには，それによって想像力のうちで二つの観念が結ばれて，既に説明した仕方で，一方が他方を自然と導き入れるところの性質を意味するのに使われる．もうひとつには，想像力における二つの観念の結合が恣意的な場合であっても，それらを比較することが適切であると考えるところの特定の状況を意味するのに使われる．（T 1.1.5.1; 強調引用者）

ここでヒュームは，NR と PR を確かに認識プロセスの違いとして捉えていると読むことができる．つまり，NR とは「一方が他方を自然と導き入れる」ような仕方で認識された関係のことであり，PR とは「想像力における二つの観念の結合が恣意的な場合」に（比較によって）認識された関

係のことである，と．

2.2 「プロセス」とは何か？

ビービーのプロセス解釈には一定の説得力があるように思われる．しかし他方で，それには曖昧さが存在し，その解釈のされ方によっては自己矛盾を抱えることになる．実際そのような批判を行ったのがミリカン（2017）である．ここではミリカンの批判を紹介しつつ，「プロセス」という言葉によって意味されているものを明確化する．

一般的に言えば「プロセス」とは，ある事態が成立するまでの段階的な手順や手続きのことである．例えばある工事現場で重大な事故が起きた場合，現場から役員までの「意思決定プロセス」が問われ，そこでは会議における情報伝達や工事の方針決定の手順と手続きが吟味される．

さてヒュームがその哲学的探究のうちで扱っているのは人間の心であるから，彼にとってプロセスとは，ある心的状態が生じる手順をあらわす．しかしここに曖昧さがある．例えばビリヤードの場面において「この手球とあの的球の衝突があの的球の動きを引き起こした」という私の昨晩の判断を考える．この判断を生み出したものは，手球と的球の知覚から推論という一連の私の心的プロセスである．他方で，この判断は因果判断であるから，私は因果関係の概念を持っている必要がある．ヒュームにとって因果関係の概念はアポステリオリに獲得されるものであるから，広い意味では因果関係の概念の獲得もまた「この手球とあの的球の衝突があの的球の動きを引き起こした」という判断の形成プロセスに入る．つまり「プロセス」と言ったとき，どの段階から記述するかが曖昧なのである．それは例えば，ある料理の制作手順といったときに，材料や調理道具の集め方から記述を始めることもできれば，それらの存在を前提にして記述を始めることもできるのと同様である．

この曖昧さがプロセス解釈にとって問題でありうると指摘したのがミリ

カンであった．彼によれば，ビービーは「プロセス」によって，比較や連合を手球と的球の知覚から「この手球とあの的球の衝突があの的球の動きを引き起こした」という判断までの心的状態の移行を考えており，しかもそれと同時に，それらを因果という概念の獲得からその判断までのより広い「発生論的あるいは歴史的」（Millican 2017, 11）な移行としても考えている．つまりこう言ってもよければ，「プロセス」によって目下の認知プロセスだけを意味している場合と，それに加えて発達プロセスを意味している場合があるというわけだ．

確かにビービーの議論にはそのような点がみられる．彼女は「哲学的関係として考えられた因果関係は因果判断へのひとつの道筋である」（Beebee 2011, 259）などと，一般的には特に断りを入れずに，目下の認知プロセスだけを意味している．しかしミリカンも指摘する通り（Millican 2017, 11），ビービーは次の箇所で明らかにそれを超えて発達プロセスまでも含めたプロセス解釈を展開する．

> 基本的な考えはただ次のようなものだ：私たちが一度因果関係の観念（必然的結合の観念のために必要な，もととなる印象を生み出す連合の習慣を持つように要求する観念）を手に入れれば，私たちは連合のメカニズムが作用しないような事例にもそれを用いることが完璧にできるようになる．（Beebee 2011, 261）

ここでビービーは，目下作動している認知プロセスに加えて，発達プロセスの記述にまで踏み込んでいる．

しかし今のところ，ビービーの解釈における「プロセス」という言葉の曖昧さ，より適切に言えば多義性は無害である．これが有害になるのは，ビービーのもうひとつの主張と組み合わされたときだ．実はビービーは，原因に関するヒュームの二つの定義が，「原因と結果についての判断や思

考が生成される，二つの別個な心理学的プロセス（two distinct psychological procedures）」（2011, 252）や「因果判断が形成される二つの別個な心的作用（two distinct mental operations）」（2011, 255）だと主張している．つまり彼女は，比較も連合も単独で因果関係を認識するプロセスだと主張している．これは明らかに先ほどのブロック引用箇所と矛盾する．なぜなら，ビービーはそこで，結局のところあらゆる因果関係の認識には連合の作用が伴うという見解を提示したからだ．そうだとすれば，彼女は「比較のプロセスは単独で因果関係の認識を形成する」と主張するとともに「比較は単独では因果関係の認識を形成できない」と主張し，矛盾しているように思われるからだ．これがミリカンによるビービーのプロセス解釈への批判である（cf. Millican 2017, 11）．

さらに，ビービーのように別個性を強調する解釈は別の問題も生じさせるように思われる．それは，別個なプロセスが協働するということはあり得るのか，あり得るとすればそれらは本当に別個だと言えるのか，という問題である[8]．

こうした難点を持つビービーのプロセス解釈は，維持できないのだろうか．この問題は，比較と連合というプロセスの実際の関係以前に，ビービーによるヒューム解釈のミリカンによる解釈の妥当性にもかかっている．つまりミリカンはビービーの解釈を正しく理解したのか，ということである．私の考える限り，ミリカンはビービーの解釈を正しく理解している．つまりビービーは，先ほどのブロック引用箇所（2011, 261）のようなことを述べるべきではなかった．なぜならミリカンの指摘する通り，ビービーが「プロセス」で意味していたのはもっぱら「因果判断を形成している目下の行程」（Millican 2017, 11）であり，発達プロセスは含まれていなかったはずだからである．しかしこのことはビービーのプロセス解釈を NR と PR の区別基準に関する解釈として考えたとき，それを完全に反故にするものではない[9]．なぜなら，特定の関係を認識するために目下作動するプ

ロセスとしては，比較と連合は独立にかつ単独で関係を認識するという主張は維持できるからである．

また協働の問題に関していえば，事柄としては，二つの認知プロセスが別個であることは，その二つが協働しえないことを意味しない．それは，例えば視覚による対象の認識と触覚による対象の認識は別個なプロセスを形成しているけれども，両者が協働して「コップは本の手前にある」と判断できるのと同様だ．また比較と連合が仮に協働しえないプロセスであったとしても，それは，同時には協働しえないということを意味するだけであって，発達プロセスにおいては連合が働き，目下の認知プロセスにおいては比較が働くという事態を妨げるわけではないのだ．

2.3　「比較」と「連合」

しかし結局のところ，連合と比較という作用が同時に協働しうるのかという問題は残されている．これは，「連合」や「比較」という言葉の意味によって決まるだろう．ビービーのプロセス解釈の曖昧性は，これを論じなかったことに起因する．そこで本論文においてこの点を補い，プロセス解釈を洗練させる．

まず「連合」から始める．連合とは第一節でみた通り観念連合原理のことであるが，ヒュームはそれを連合というよりもむしろ移行として特徴づけている．このことは次の複数のテキストから明らかである．

> この［観念］連合を生じさせて，精神をこの仕方で一方から他方へと運ぶところの性質は，三つある．すなわち「類似」，「時間と場所における近接」，そして「原因と結果」である．（T 1.1.4.1; 強調引用者）

> これらの性質［NR］が観念の間に連合を生み出し，一方の観念が現れれば自然と他方を導くということは，証明する必要もないだろうと考

> えている．（中略）私たちの想像力が容易に，ある観念からそれに似ているものに移行すること，そしてこの性質だけでも想像力にとっては十分な絆と連合となることは明らかだ．同じく，（中略）対象を把握する際に空間と時間の諸部分に沿って移行せずにはいられないということもまた明らかだ．（中略）対象の間の原因と結果の関係ほど，想像力のうちに強い結合を生み出し，一方の観念をして他方の観念を思い起こさせるような関係はない．（T 1.1.4.2; 強調引用者）

> 「関係」という言葉はふつう，互いにとても異なった二つの意味で用いられる．ひとつには，それによって想像力のうちで二つの観念が結ばれて，既に説明した仕方で，一方が他方を自然と導き入れるところの性質を意味するのに使われる．（T 1.1.5.1; 強調引用者）

これらはいずれもヒュームが観念連合の性質を記述したものであり，どのテキストにおいても「連合」によってもっぱら観念の間の移行が論じられていることが明らかである．特に二つめの引用箇所では，移行だけで想像力にとっては「十分な絆と連合となる」と言われており，移行が連合の本質をなすことすら示唆されている．このことは，連合による関係の認識つまり NR が因果や類似といった関係の観念を必要としないことを意味する．なぜなら，観念 a から観念 b への移行が成立すればそれだけで連合が作用したことになり，プロセス解釈によれば，それで両者の間の関係を認識したことになるからだ．

他方で「比較」の場合には事情が異なっている．ヒュームは PR を論じた箇所ではっきりと「哲学的関係の観念（ideas of philosophical relation）」（T 1.1.5.2）という言葉を用いているのだ．さらにその直前の段落では具体例として，「対象を比較することによって距離の観念を獲得する」（T 1.1.5.2）と述べている．だから，比較によって観念 a と観念 b の間の関係を認識

するプロセスが成立するためには，両者の観念に加えて，関係の観念を持つことが必要である．この関係の観念とは，例えば東京と名古屋の距離が 400km であるという特定の観念であるが，それは「x と y はしかじかの距離離れている」という関係の概念を東京と名古屋に適用したものだと言える．つまり別の表し方をすれば PR の認識が成立するためには，主体 S が関係タイプの観念 R（x, y）を観念 a, b に適用することで，R（a, b）という観念を持っている必要があるわけだ．

「比較」と「連合」の内実がこのようであるとすれば，一見したところ，両者が同時に協働することはできないように思われる．というのも，関係の概念を用いずに関係を認識するプロセスと，関係の概念を用いて関係を認識するプロセスとは，排他的であると考えられるからだ．しかしそうとも限らないようである．例えば認知科学における「二重視覚システム仮説（the dual visual systems hypothesis）」によれば，脳は腹側経路と背側経路という異なる二つの経路を通して視覚情報を同時に処理している（cf. フィッシュ 2014, 195–196）．このとき興味深いのは，対象の同定や認知を司っているのがもっぱら腹側経路だということだ．これはヒュームの体系からすれば，腹側経路は対象の概念をともなった認識であり，背側経路は対象の概念をともなわない認識である．ここからわかるのは，現代の認知科学の知見によれば，対象 a, b の間に成立している関係を，関係の概念を用いずに認識し，かつそれと同時に，関係の概念を用いて認識するということが矛盾ではない（つまり両者は協働しうる）ということだ．

ヒュームは当然ながら以上のような神経科学的知識をもたなかった．したがって，比較と連合がそれぞれ関係の概念を必要とする認識プロセス，必要としない認識プロセスであると明確化されても，それが協働しうるかどうかという問題には決着がつかないことを認めざるを得ない．しかし確かなのは，両者が協働しうるプロセスかどうかということは，プロセス解釈の妥当性を左右する要素ではないということだ．この解釈にとっては，

ただ両者が関係の観念の必要性という観点において区別できるプロセスであり，その点で NR と PR が区別できるだけで十分なのである[10].

3. NR と PR の区別とはなんだったのか

3.1 デフレ解釈を批判する

前節でビービーによるプロセス解釈を紹介し，それを明確化することで，ミリカンの批判から擁護した．しかし彼はプロセス解釈に特有の難点があると主張しているだけでなく，そもそも NR と PR の間に区別基準を見出そうとする解釈をまとめて批判し，自身の解釈を提示している．つまり彼の議論は，伝統的解釈も批判の対象となる既存の解釈すべてに対する包括的な批判である．ミリカンによれば，NR と PR の区別とは「単なる言葉の説明（a straightforward matter of verbal clarification）」（Millican 2017, 11）に関するものであり，「ヒューム自身の理論に照らしても，哲学的に実質のないもの（insubstantial）」である（2017, 12）．つまり「関係」という言葉は日常と学問的探究において異なる使われ方をするが，ヒュームは自分が「関係」という言葉を用いるときには，後者において使われる際の意味を持たせるという宣言に過ぎない，というのがミリカンの解釈である．ここからミリカンは自身の見解を「デフレ的説明（deflationary account）」と呼んでいる（*ibid.*）．本論文では「伝統的解釈」や「プロセス解釈」といった名前に合わせて，これを「デフレ解釈」と呼ぶことにする．要するにミリカンによれば，ヒュームの NR と PR の区別に関する宣言は，ある料理本で東京における「sushi」とカリフォルニアにおける「sushi」で指示対象が異なることを示したうえで，著者がカリフォルニアにおける「sushi」の意味で「すし」という言葉を用いると宣言したのと変わらない．

ミリカンはデフレ解釈を提示するにあたって NR と PR の間に実質的な区別基準はないと示すために，逆にそれを示すと思われるテキスト箇所をあげる．そして，それが実は実質的な区別基準の存在を示すものではない

と論じることで，NR と PR の実質的な区別基準の存在を否定する．その箇所とは次の二つである．

（A）因果関係は，隣接，継起，恒常的連接を含むものとしては哲学的関係だけれども，私たちがそれに基づいて推論する，つまりはそこから何らかの推理を引き出すことができるのは，ただこの関係が自然的関係である限りにおいてなのだ．（T 1.3.6.16）

（B）［因果関係］に関しては二つの定義を与えることができて，それらの定義はただ同じ対象についての異なる見方を提示し，その関係を哲学的関係と自然的関係のどちらと考えさせるか，つまりは二つの観念の比較とそれらの間の連合のどちらと考えさせるか，という点でのみ異なる．（T 1.3.14.31）

これらはどちらも，ビービーがプロセス解釈を支持する（つまり NR と PR の間には実質的な区別があると主張する）ために用いたテキストである．両者のテキストにおいてヒュームは，NR と PR の区別を実質的なものであるとみなしているように思われる．以下ではこれらに関するミリカンの解釈を整理する．

まずミリカンによれば（A）のテキストは，ヒュームが「合理的な人々」の特徴である「哲学的推論」と，「帰納推論に関する本能的な連合に基づいた自然的説明」との間の対比につまったことによって生まれたものである（*ibid.*）．要するに，正しい因果関係は合理的な人々が認識する関係である限りにおいて哲学的関係だけれども，その発生論的な源泉は本能的な連合にある，ということを説明せざるを得なくなって，ヒュームは（A）のように書いてしまったというわけだ．

（B）のテキストに関してもミリカンは，ヒュームが過ちを犯したことで生まれたものだと主張する．彼によれば，ヒュームは因果関係には対象

の比較のための定義と推論のためのそれの二つの定義が必要であることを正しく理解していた．しかし，その区別と，NR と PR という区別は別のものであるにもかかわらず，ヒュームは以前に自分が導入していた区別をこれ幸いとして適用してしまった．これがミリカンの診断である．結局彼は，（B）のテキストに関して「ヒュームは，因果関係は哲学的関係でもあり自然的関係でもあるという文脈的な偶然の一致に誤って導かれ，なぜ必然的結合（ひいては因果関係）が二つの定義を許すのかということの理由を誤って同定してしまった」と結論した（2017, 13）．

以上のようにミリカンによれば，一見すると NR と PR の実質的な区別の存在を支持するように思われた（A）と（B）のテキストは，実はヒュームの過ちから生まれたものであり，実は NR と PR の実質的な区別の存在を支持するものではない．また彼は，もし NR と PR の間に実質的な区別が存在するのであれば，ヒュームは因果関係と同じく NR にも PR にも含まれる類似性と近接性の関係についても，二つの定義を提示していたはずだと主張する（実際のところヒュームは提示していない）．こうした理由からミリカンは，デフレ解釈が妥当であると主張する．

しかしミリカンのデフレ解釈は主に二つの理由から受け入れることができない．第一に，彼が拙速にヒュームに対して過ちを帰しているという点である．確かに因果関係に関する NR と PR の実質的区別の存在を支持すると思われるテキストは（A）と（B）に限られるかもしれないが，その否定は，関係一般に関する NR と PR の実質的区別の存在を否定するものではない．一般に NR と PR の間に実質的な区別基準があるかという問題は，ヒュームの哲学体系全体からより慎重に判断されるべきものだ．第二にミリカンの解釈は，ヒュームが NR と PR という区別を導入した動機についての解釈にとどまっているように思われる．解釈者は，動機についての解釈を超えて，NR と PR が実際はどのような区別であるかを議論し，別に解釈を提示することができるはずだ．だから，ヒュームが NR と PR の

区別を導入した T 1.1.5.1 の解釈に関しては，ミリカンの言う通り「単なる言葉の説明」という見解が正しいかもしれない．だがそのことは，NR と PR の実際の区別基準が存在しないことを意味しない．なぜなら私たちはさらに，この言葉の使われ方の違いを構成しているものは何か，と問うことができるからだ[11]．それは，料理本の著者や食文化の専門家に対して東京の「sushi」の指示対象とカリフォルニアの「sushi」の指示対象はどのように異なっているのかと問うことができるのと同じである．したがって，NR と PR の指示対象がそれぞれどのような外延を持つかを最後に明らかにする必要がある．

3.2　人間に固有の本性としての「比較」作用

プロセス解釈は，NR と PR は関係の認識プロセスに応じて区別される，という見解である．例えば私が「このミカンとあのオレンジは似ている」という知識を連合によって獲得した場合，「このミカン」と「あのオレンジ」の類似関係は私にとって NR になる．また，私が「パルテノン神殿と法隆寺は似ている」という知識を比較によって獲得した場合，「パルテノン神殿」と「法隆寺」の類似関係は私にとって PR になる．さらに何度も両者をともに考えて，習慣がつけば，私は「パルテノン神殿」の観念から自然と「法隆寺」の観念に移行できるようになる．こうなれば私にとって「パルテノン神殿と法隆寺は似ている」という関係は，今度は NR になる．またさらに，私がその習慣を失って，それを PR として認識することもありうるのだ．

このような説明は，NR と PR の区別が個人の育ってきた環境や文化，受けてきた教育に相対的であることを意味するだろう．例えば私にとって川は自然と釣りを連想させる（つまり川と釣りの関係は NR である）が，川から釣りを連想しない人もいる．あるいは私はソーセージとザワークラウトを特定の仕方で比較しなければ関係を見出せないが，ドイツで長く暮ら

した人の中にはこれらを自然と連合する人がいるはずである．もしこの相対性が強調されれば，結局のところ NR と PR の区別がその認識プロセスに依存するという洞察の重要性が失われてしまう．そこで最後に，連合と比較というプロセスと人間本性との関わりを論じることにする．

ここで注目したいのは，連合によって（つまり関係の観念なしに）認識できる関係には限りがあるということだ．例えばヒュームの因果関係の認識に関して次のように述べている．

> 私たちが原因と結果の観念（中略）にたどりつくのは，ひとつの事例からではない．もし私たちが互いに異なっている対象の個々の連接しか見なかったとすれば，決して原因と結果の観念を形成できなかっただろう．（改段落）しかし改めて想定してほしい．私たちが，同じ対象が常に連接している複数の事例を観察する，と．そうすれば私たちはただちにそれらの間の結合を把握し，一方から他方へ推理し始める．それゆえに，類似する事例の複数性が，力能や結合のまさに本質であり，その観念が生じる源泉なのである．（T 1.3.14.15,16; 強調引用者）

ここでヒュームは，私たちは単一の事例を観察するだけでは原因から結果へ推論することができないと論じている．強調した箇所にあるように，同じような事例を複数回観察することが習慣を形成し，連合を生じさせるのだ（cf. T 1.3.6.12）．だからもし連合のメカニズムしか持たなかったとすれば，複数回経験できるような関係の認識しか可能ではなかったはずだ．

しかしヒュームは次のようにも述べる．

> 最も優れた知識を持つ人々が，多くの個別的な出来事に関して不完全な経験しか持たないということほどありふれたことはない．これは自然と不完全な習慣と移行を生み出す．しかし私たちは，心が原因と結

> 果に関する別の観察を形成しており，それがその［不完全な］観察から行う推論に新しい力を与えるということを考えるべきである．これによって私たちは，十分に準備され吟味されている場合，単一の実経験にもとづいて議論を立てることができる．（T 1.3.12.3; 強調引用者）

ここでヒュームは明らかに，人間は連合の作用が働かなくとも因果関係を認識できると主張しているようにみえる．この時重要なのは「別の観察」だろう．これこそ因果関係の観念や自然の斉一性の観念であり，複数の観念に因果関係の観念を適用することで，つまり比較によって，一度しか経験できなかったような対象どうしの間の関係を認識できることを意味する．このことは，少なくとも近接つまり「時間と場所の関係」についても確かである[12].

では結局のところ NR と PR のこうした範囲の差は何を意味するのか．実はこの問いに対してヒュームが明確に答えている箇所はない．しかしこれは，動物と人間との推論能力の差異を説明する，つまりは，比較という作用がまさに人間を動物と差別化する要素であることを示唆している，と考えられる．というのも彼は『人間知性研究』において動物の推論能力を論じる際に，「私たちの知的作用の固有の対象であるところの関係つまり観念の比較」（EHU 9.6）と明言しているからだ[13].

またヒュームは『道徳政治文学論集』に収められた「人間本性の尊厳ないし卑しさについて」（初版 1741 年）という『人間本性論』のすぐ後に出版したエッセイのなかで，動物と人間との差異について，次のように述べている．

> ［人間］は原因と結果を長く巧みにたどる．また個別のみかけから一般的原理を引き出す．発見したものを改善する．過ちを正す．そしてまさにその過ちを利用する．他方で私たちはこれと全く反対の被造物

> ［すなわち動物］も見知っている．周囲にある目立ったわずかなものの観察と推論に制限されている．好奇心もなければ先を見通す能力もない．本能によって分別なくふるまい，短時間でその最高の完全性に達してしまい，そこから先は一歩も進ことができない．これらの間にはなんと大きな違いがあることか．（E DM 5）

確かにヒュームはこの前後において，こうした比較に冷笑的な態度をとる．しかしだからと言って彼が動物と人間との間にこうした認識能力の差があるという主張を否定したわけではない．つまり，動物は連合によって狭い範囲の関係しか認識できないが，人間はそれに加えて比較のプロセスを持つことで広い範囲の関係を認識できるというわけだ．

ヒュームは確かに『人間本性論』や『人間知性研究』のうちで，人間と動物の連続性を強調した（cf. T 1.3.16.5–8; EHU 10.1.1–5）．しかしそれは観念連合原理という原理に限ってそうしたのであり，「比較」というプロセスによってより多くの関係を把握できるという人間に特有の本性によって，人間と動物の差異を示唆したと言える．要するに NR と PR の区別基準である連合と比較というプロセスは，ヒュームの人間本性の探究である人間学にとって重要な実質的区別を示すものだったのである．

おわりに

本論文はこれまで，ヒューム『人間本性論』における「自然的関係」と「哲学的関係」の区別基準を論じてきた．そして，ビービーによって提示されたプロセス解釈の曖昧性をとり除くことで，それをミリカンの批判から擁護した．ここで，本論文が示したプロセス解釈の概要を振り返っておきたい．それは以下のようなものである．すなわち，私たちが複数の対象 a，b の間に成立している任意の関係 r を認識する方法には「連合」と「比較」の二つがある．前者による認識の成立条件は，主体 S の観念 a から観

念 b への移行である．他方で後者によるそれは，S が a と b に対して R の観念を適用することである．前者によって r が認識された場合それは NR となり，後者によって認識された場合それは PR となる．このとき，連合と比較が同時に作用している可能性や，協働している可能性は排除されない．

こうした見解は，自然的関係と哲学的関係の区別が，ビービーやミリカンが拘泥していたような，単に因果関係の二つの定義の問題に関わるだけでなく，ヒュームの人間学のプロジェクト全体にも関わる帰結をもたらすことを示している[14]．

凡例

1. 本論文における引用中の傍点について，引用者による強調の場合は末尾にその旨を明記した．とくに断りのない場合の傍点は原文におけるイタリックを示している．また，引用中の［　］について，とくに断りのない場合は引用者による補足である．
2. ヒュームの著作からの引用・参照箇所は以下のように示す．
   ・『人間本性論』（*A Treatise of Human Nature,* first published 1739–40）については，T と略記し，ノートン版の巻・部・段落・注の数字を記す（例：T 1.3.6.4）．なおノートン版とは，*A Treatise of Human Nature*, edited by D. F. Norton and M. J. Norton, Oxford: Oxford University Press, 2000 をさす．
   ・『人間知性研究』（*An Enquiry concerning Human Understanding*, first published 1748 as *Philosophical Essays concerning Human Understanding*）については EHU と略記し，ビーチャム版の章・（部）・段落・注の数字を記す（例：EHU 10.1.5）．なおビーチャム版とは，*An Enquiry concerning Human Understanding*, T. L. Beauchamp (ed), Oxford: Oxford University Press, 1999 をさす．
   ・『道徳政治文学論集』（*Essays, Moral, Political, and Literary,* first published 1741 as *Essays, Moral and Political*）については E と略記し，ビーチャム&ボックス版のエッセイ略号・段落の数字を記す（例：E FP 5）．なおビーチャム&ボックス版とは，*Essays, Moral, Political, and Literary*, 2 vols., T. M. Beauchamp, and M. A. Box (eds.), Oxford: Oxford University Press, 2021 をさす．

註

[1] 例えば関係一般の解釈を巡っては，ヒュームは関係の実在論をとったのか，あ

るいは唯名論をとったのかという問題がある．コスタは実在論を主張し，他方でミリカンは唯名論を主張している（cf. Costa 1998; Millican 2017）．またイヌカイはこの問題に関連して，ヒュームの関係に関する現象学的側面を論じている（cf. Inukai 2010）．こうした関係一般の解釈とは別に，これまで多くの論者が「ヒュームのフォーク（Hume's fork）」といって，いわゆる分析的真理と総合的真理の区別に関するヒュームの立場を明確化しようとしてきた．

[2] チャーチが比較的早いうちから指摘し，ミリカンが詳しく論じているところによれば，ヒュームはここで「哲学者」によってロック（John Locke）を念頭においている（cf. Church 1941; Millican 2017）．

[3] このような関係の存在をヒュームが認めるかどうかは議論の余地がある．

[4] ビービーはこの解釈を「標準解釈」と呼ぶ（cf. Beebee 2011, 246）．また彼女によれば，標準解釈には別のタイプもある．それは，「PR が対象の間の関係であるのに対して，NR はそれに到達するためのプロセスだ」という解釈である．ビービーはこの種の見解を Robinson (1962) や Noonan (1999) に帰している (cf. Beebee 2011, 247).

[5] ヒュームの体系では人間の思考のユニットは観念であるから，確かにある意味では両者とも観念を関係項にもつとも言える．しかしここで NR と PR の区別に関して問題にすべきなのは，「自然的関係」や「哲学的関係」という言葉によって指示されている実在の対象の方である．NR は実在の対象の関係を表象し損ねることもあるが，だからといって NR が観念を関係項にもつことにはならない．ただそれは NR の表象に失敗したことを意味するだけだ．

[6] なお，ビービーは本論文とは異なる仕方でこの解釈を否定している（Beebee 2011, 246–247）．

[7] NR と PR が純粋に心理学的な区別だからといって，両者が心理学的な関係つまり観念の間の関係であることにはならないということは，ビービー自身がはっきりと述べている（cf. Beebee 2011, 250）．

[8] 別個性と協働の問題は本論文の著者による提起であり，ミリカンによるものではない．

[9] ただしミリカンが指摘する通り，原因に関する二つの定義の解釈としては問題である．

[10] このように述べたとき，本論文が伝統的解釈を退け，「NR と PR は排他的ではない」という主張を支持したことが思い出されるかもしれない．そして，もし NR と PR が別個なプロセスによって認識される関係であるならば，NR と PR が排他的である可能性を否定しきれていない，と批判されるかもしれない．しかしこの批判は当たらない．なぜなら二つのプロセスが別個で排他的であることは，そのプロセスによって認識される関係の集合も別個で排他的でなければならないことを意味しないからである．そもそも，二つのプロセスの互いから

の独立性や排他性は，NR と PR のそれぞれの集合の独立性や排他性とは別問題なのだ．

[11] もしこのように問うた結果として実は NR と PR が同一の集合であり，両者の区別に実質がなかったことが明らかになれば，それはデフレ解釈の正しさを裏付けるだろう．しかしすでに本論文第一節で述べた通り，ヒュームは，PR を NR よりも多くの要素を持つ集合としている（意味を「拡張」する）のだから，そのような解釈はできないはずだ．

[12] ヒュームは NR のうち近接の関係についても「感官はその対象が変化する際に，それらを順序に従って変化させざるを得ない，すなわち，互いに近接している通りに捉えざるを得ないので，想像力が長い習慣によって同じ思考の方法を獲得し，その対象を把握する際に空間と時間の諸部分に沿って移行せずにはいられない」として，習慣の影響が必要であることを認めているからだ．

[13] ヒュームは『人間本性論』においても『人間知性研究』においても，動物の推論能力や知識を「通常の」ものと「尋常でない」ものに分けている（cf. T 1.3.16.5; E 9.6）．しかし彼は結局，動物はどちらの知識の獲得においても観念連合しか用いていないと結論する（cf. E 9.6）．

[14] 本稿は，JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2123 の助成を受けた研究成果の一部である．また本稿の執筆・改稿にあたっては，ヒューム読書会や柏端ゼミのメンバーなど，多くの方々にお力添えをいただいた．とりわけ，本稿の草稿段階から議論にお付き合いいただいた鵜殿憩氏と滝沢正之氏，そして改稿にあたって，全体の構成に関するアドバイスと内容に関する重要な指摘をくださった柏端達也氏に，深く感謝する．

参 考 文 献

Beebee, H. 2011, “Hume’s Two Definitions: The Procedural Interpretation,” *Hume Studies*, 37 (2), 243–274.

Bennett, J. 1971, *Locke, Berkeley, Hume: Central Themes*, Oxford: Clarendon Press.

Church, R. 1941, “Hume’s Theory of Philosophical Relations,” *The Philosophical Review*, 50 (4), 353–367.

Costa, M. 1998, “Hume on the Very Idea of a Relation,” *Hume Studies*, 24 (1), 71–94.

フィッシュ，W．山田圭一監訳．2014，『知覚の哲学入門』，勁草書房．

Hausman, A. 1967, “Hume’s Theory of Relations,” *Noûs*, 1 (3), 255–282.

Hume, David. [1739–40] 2007, *A Treatise of Human Nature*, 2 vols., Norton, David F. & Norton, Mary J. (eds.), Oxford: Oxford University Press.（木曾好能［他訳］．1995–2012．『人間本性論』，法政大学出版局．）

———, [1741–1777] 2021, *Essays, Moral, Political, and Literary*, 2 vols., T. M. Beauchamp, and M. A. Box (eds.), Oxford: Oxford University Press.

———, [1748] 1999, *An Enquiry concerning Human Understanding*, T. L. Beauchamp (ed), Oxford: Oxford University Press.（神野慧一郎，中才敏郎「訳］．2018．『人間知性研究』，京都大学学術出版会．）

Inukai, Y. 2010, “Hume on Relations: Are They Real?” *Canadian Journal of Philosophy*, 40 (2), 185–209.

Millican, P. 2017, “Hume’s Fork, and his Theory of Relations,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 95 (1), 3–65.

Noonan, H. 1999, *Hume on Knowledge*, London: Routledge.

Penelhum, T. 1974, *Hume*, London: Macmillan.

Robinson, J. 1962. “Hume’s Two Definitions of “Cause”,” *The Philosophical Quarterly*, 12 (47), 162–171.